（ヨーロッパの旅）

マールブルク

平井信義

（一）

二月の終りから三月にかけて、私は二度目のマールブルク滞在を楽しんでいました。木という木はすっかり葉を落して、霙さえ降るような日々でありましたが、町の中につき出たように丘があって、その上に聳えているお城は、前にも増して私に誘いかけてきました。お城に上れば、町の屋根から屋根へと隅々まで見渡せる楽しみがありましたが、私にはむしろ、人気のないお城の壁に沿って歩きながら、空想に耽る慰みがあったのです。心の冷たい夫とのひややかな関係を絶ち切り、一人故郷に残して来た子どもへの愛情もかき立てることが出来ずに、この城の麓で、人間の生き方にあれこれ思い迷う日本婦人の姿が、何とはなしに浮んで来るように、この城は大きな石の塊に苔をつけた壁を、どんより曇った日中の空にかかえていました。

貧しいハンガリーから逃れて、ドイツに職を得た若い女性と、その女と恋に落ちた日本の青年とが、この城の中の凍てつくように暗い壁と壁との狭い空間で、接吻をし合う光景も浮んで来るようなにおいも、お城に降りかかる霙の中から嗅ぎとることが出来ました。

そうした空想に耽って歩いているときに、私はお城の石畳に響き返ってくる子どもの声を耳にしました。その方に足を速めますと、三人の子どもが遊んでいます。二人の女の子と男の子との三人が、チョークで四角をかいて、その中に石を蹴り入れる遊びをしているのを私は認めました。代り番で蹴り入れる石はどれも、凸凹のある石畳の上で不規則にはねてなかなか目的の四角に入りません。交替しては他人に番を譲ると、かじかんだ手に息をふきかけながら、し

かし目は熱心に石の行方を見ている子どもたちの顔は、私の姿には一向気付かないようでありました。男の子は、革の半ズボンをズボン吊りでしっかりと吊り上げ、丸出しにした膝頭を寒さで赤く染めていましたし、女の子も、短いスカートの下から白いブルーマをのぞかせて、白い短かい靴下の間に、同じように膝頭を出していました。

「グーテンタック（今日は）」

と私は仲間入りをするような気持でいいますと、初めて私の存在に気がついたように三人は、それぞれ小声で「タック」「タック」と挨拶を返し、目の奥から見詰めるように青い目を、私の方に向けました。

「みんな、何しているの？」

「ヒップフシュピール（石蹴り）」

と一番背の高い女の子が答えました。小学二年生位でしょうか。赤い毛の少しもない金髪は、白い顔の肌にふさふさと揺れかけていました。

「おじさんは、どこから来たの？」年下の男の子がなお手に息をかけながら、ききました。

「日本から」と私。

その時三人は顔を見合せて「ヤパーナー（日本人）」「ヤパーナー」とささやき合いました。その三人の吐く息は、立のぼって高い城壁の高みまで煙るようでありました。

「日本の子どもも石蹴りをするよ」

「私たちと同じように？」

「同じようだとも」

又、三人は顔を見合せて、頬笑み合いました。

「日本て、ずい分遠いんでしょ？」

「うん、ドイツとは地球の裏側だものね」

「おじさん、船できたの？」

「ううん、飛行機で」

三人は又、驚いたように顔を合せました。

「飛行機だと、二日で日本から来ることができるのだよ。日本へ来たい？」

三人は一寸考えるように、私の顔を見詰めていましたが、男の子が、

「わからないや」

と答えますと、二人の女の子も、それに同意したように、顔をひきしめました。

一としきり、霙が強く降り始め、子どもたちの上へも、白い雫のかがやきとなって、降りかかりました。

「いきましょう、おじさん、さようなら」金髪の子に次いで男の子が、それに負けまいと背の低い方の女の子が「アウフヴィーダーゼーエン（さようなら）」と交々いいながら、お城の裏手へとかけ出していきました。

音一つないお城の壁際に立って、霙をさけながら、低い雲がお城の屋根すれすれに動き去っては、又流れて来るのに酔ったような気持で、私はいまの子どもたちの姿を、もう一度、心に思い浮べていました。

（二）

ホスビタは、私がこの病院で最初に抱き上げた子どもです。私の胸からからだをのばすようにして、高みから他の子どもたちを見下し、得意気な微笑をたたえてホスビタはパチパチと手を打ちました。

「ホスビタ、いいことね」と、病棟主任で女医さんのウェーバーさんは、ホスビタに合せて手を打ってみせました。ここは、マールブルク大学精神科の小児病棟です。初めて私がそこを訪れましたとき、案内役をして下さったウェーバーさんのあとから病棟に入ったそのとき、ちょこちょこと私に寄って来てすがりついたのがホスビタだったのです。

ウェーバーさんの話によると、ホスビタのお父さんはお母さんとホスビタをおいて、遠い国にいってしまい、その後お母さんもホスビタをおき去りにして、行方がわからないままに、赤ん坊のときからホスビタは乳児院に預けられました。ところが、その乳児院でのホスビタはひどい施設病（ホスピタリスムス）にかかり、食事まで拒否して栄養失調症になったということです。二歳をすぎてから、このウェーバーさんの病棟に引きとられて既に四カ月、ウェーバーさん初めここに働いている皆から「ホスビタ、ホスビタ」と可愛がられている中に、だんだんと頬笑みの多い子どもになり、栄養状態もよくなるとともに、すっかり人なつっこくなって、益々みなから可愛がられているのですと、ウェーバーさんは私に話してくれました。

ホスビタは、なかなか私の腕から下りようとしません。下ろしかけると、しがみついて私の体をよじ登ろうとします。「ホスビタ、もうおりましょうね」と、保母さんの一人が私から受けとろうと、ホスビタに手をかけますと、ホスビタは私の肩のあたりをきつくつかんではなしません。

「いいですよ、いいですよ」と、私はしばらくホスビタのしがみついているままにさせていました。ウェーバーさんは、

「子供って、すぐ大人の心を見抜くものですね。自分を可愛がってくれるかどうかということを……」といいながら、自分の室へ私を招き入れてくれました。

二日目の午後、私はウェーバーさんの机の横に坐って、問題児の話をしていました。話が途切れたとき、何を思ったのか、ふとウェーバーさんは「ドイツの女性をどうお思いになりますか」と私の方をまともに向いてたずねました。そして、私に弁解するように「日本の女性と較べたら、ずい分ちがうでしょうね。私ももっと静かな落付いた生活をしたいと願っているのですけれど」と言った。

「日本の女性をご存じなのですか？」

「いいえ、実際には会ったことがないのですが、本などで読んで知っているのと、想像とです」

「日本の女性が総て、あなたのお考えのように、静かな女性ではありませんが、何と表現したらよいでしょうね、動作はたしかにやさしいと言ってもよいでしょう」

「子どもと接するものは、矢張りやさしいということが大切です

ね。やさしく子どもを扱うことが、子どもの心にどんなによいかということを、私はホスピタのような小さい子どもを育てて泌々感じたのです。殊に、このような病棟で働いている女性は、子どもにやさしく当るということが何より必要で、私はそのような性質の人を選ぶのに、非常な注意を払っています」

「ウェーバーさん、私もあなたと全く同感です。幸い、日本でも子どものために働いている女性の殆んどが、みな子どもにやさしい人たちなので、日本の子どもは非常に幸福だということができましょう」

「ご存じのように、来年はこの向うの大きな病棟ができて、私どもそこへ移ることになるわけですが、そのときに、子どもにやさしい人が集ってくれるかが心配です。どうしても問題児の治療には、そうした気持の医者や看護婦や掃除夫の人が、みな気持を合せて子どもを扱わなければなりませんものね」

ウェーバーさんはドイツ人としては非常に小柄な女性でありました。断髪にしたその毛は、むしろ真白に近く、刻みのきつい鼻立ちも目も、高い頬骨も、私には非常に気性の勝った人のようにとれました。美しいとは言えない顔立からでは、一寸年齢は判じかねますが。ただ、目だけがやさしさをたたえていました。私はその目元が好きでした。

「今日は、先生を御紹介する意味もあって、みなでお茶の会をしますから出て頂けますか。四時からです」

私は喜んでそのお茶の会に出席しました。ウェーバーさんの他に医者が二人、看護婦も、掃除をしている二人の若い女性も、狭い室の中に坐って私どもを待っていました。このようなことは、日本では珍らしくありませんが、ドイツでは恐らく破格なことと言えましょう。それまでの五カ月のフランクフルトの生活で、このような経験は初めてでした。殊に大学病院は格式が高く、教授は医局員と親しくお茶を飲むようなことは全くなく、医局員が掃除婦と親しく口をきくことさえないのを、私は何か淋しい気がしていました。それが、このウェーバーさんの病棟で、初めて救われたのです。

お茶を飲み、パンをほうばりながら、質問は日本のことに集中しました。気候のこと、景色のこと、カイザーのこと、そしてホスピタのような子どものことなど、――私はお茶を飲む暇のないほど、それらに答えなければなりませんでした。

再会を約束してウェーバーさんと固い握手をしたのが三月の三日日本の雛の節句の日でありましたが、その後遂に私はウェーバーさんに会う機会に恵まれなかったのは、返す返す残念なことです。お城の聳えている静かな町マールブルクは、いま霙が降っているかも知れません。夜も更けて、私の机のわきではとろとろとガストーブが燃えていますが、時刻が八時間おくれるマールブルクは午後の四時頃です。ウェーバーさんはきっと、新築の大きな病棟で甲斐甲斐しく働いていることでしょう。ホスピタも、ウェーバーさんやその他のやさしい勤務員のあとを追って、ちょこちょこと新しい病棟を歩き回っていることでしょう。一と月前にウェーバーさんから来た手紙の終りに「ホスピタも元気です」と書いてありました。

（筆者はお茶の水女子大学教授）

＊　＊　＊